天地壊滅とメシア

文学部　山田利明

キーワード：メシア・種民・終末論・善・悪

『旧約聖書』創世記には、頽廃を極める地上の民を洪水によって蕩尽し、神と共に歩むノアとその家族のみを残して、次の新たな世界を開くという有名な「ノアの方舟」の記述がある。

実は、これときわめて類似した思想が、四世紀から五世紀の中国にもあって、神の教えに背く人々が洪水や大火によって滅尽して、善人のみが次の新たな世界に残る「種民」となるというのである。種民とは、新しい世界の種（たね）となる人であり、新世紀の人類の祖ということである。

また、仏教においても、弥勒下生の信仰があり、弥勒菩薩が釈尊入滅後の人々を救済するために現世に現れて、仏となって救うという。この信仰によって、中国では中世以来近代に至るまで、弥勒仏を奉じた宗教結社があらわれ、時に叛乱一揆の温床となった。

メシアの思想の根底には、現在あるいは将来、この世界が滅亡するという危機感があり、一般的ないしは宗教的道徳を実践するものが次の世界に生き残れるとする信仰がある。それは人間個々人の道徳的努力が、次の世界への渡航資格を手に入れるという点で、きわめて宗教的な色彩を帯びるが、実際に起こった地震や洪水・噴火などの自然現象が天地革新の契機とされることが多い。

ここでは、道徳の頽廃や非行によってもたらされる天地壊滅の思想をとりあげながら、道徳と自然の関わり方を考えてみる。

1

広く知られた中国の伝説の中に、聖王とされる殷の湯王が大旱の際に自からを責め、天に祈ったところ、たちどころに大雨を得たという話がある。古くは後漢の『論衡』感虚篇に記され、湯王伝説の柱を構成する。数年にわたる旱魃に際して、人々の生命の危機を回避すべく自からの非行の有無を天に問う。その誠意に感動した天は雨を降らす。ほぼこのような筋立で展開される説話は、湯王の至誠によって民が救われることを示すが、これもまた見方によっては、人類が滅亡する寸前での救済を意味するとも解せられる。実際、洪水と旱魃は古代の中国人にとって恐怖の的であった。伝説に洪水・旱害の記述が少なくはなく、歴代の王朝が治山治水に尽瘁した事実はこれをあらわす。特に黄河々口が数回にわたって大きくその位置を変えていることは、この地域が一円数百キロメートルに及ぶ水害に見舞われたことを示すといえる。一望千里、湖沼と化した耕地からはその年の収穫は望むべくもない。当然農民は土地を離れて流民となる。また、長江流域における洪水も、六

朝頃までは頻繁に発生している。実は、この洪水が天地革新の思想へとつながる要因となる。

四世紀末頃にその最古層部が作られたと考えられる道教経典『太上洞淵神呪経』は、当時の長江下流域の民間信仰教団によって作られた経典である。例えばその中に、

> 道がいうには、大劫がいままさに来たらんとしている。大水が中国をおし流し、天下を滅尽して人民はことごとく死す。ただ、道士の中でこの経典を授けられたものは、九龍が降り迎えて、天人百億、善人と悪人をえらび分ける。……（道言、大劫将近、水流中国、天下蕩除、人民死尽。唯有道士受経之人、九龍来迎、天人百億、選択善悪…巻一）

という。新しい世界がやって来る。その際には大水が中国を襲い人民はことごとく死に絶える、というのである。ただこの経典を受けたものだけが助かると。別の条には、「道がいう、世間は人の悪行を促し進めて、法を信じるもの少なく、大水はすぐ近くまで来ている。お前たちの中で溺れて死亡するもの聚(おお)し」と。洪水の惨状を知るものに恐怖心を起こさせ、それを信仰へと結びつけるのであるが、こうした天地壊滅の図式は、絶対神である天ないしは神の存在なくしては成り立たない。人間の能力を超越した絶対神は、常に公平公正であり、その存在そのものが善である。つまり、絶対神の判断は、善を救い悪を滅すところにある。

さて、問題はその善・悪の内容である。何を善とし何を悪とするのか。実は最古層部とされる巻一には、明確な善悪の規定はない。僅かに「道言、汝等大邪王、汝等先世、無福、不信大道、作罪山積、今在邪中」（道がいう、お前たち大邪王よ、お前たちの前世は福運なく大いなるわが道の教えを信ぜず、罪を犯すこと山のごとし、だからいまこの邪悪の中にある）、「我等自昔以来、専行悪事、與道有反」（われ等邪悪の鬼は、昔からもっぱら悪事だけを行って道に反いてきた）など、一般的な悪行と道を信じない行為を指している。そうであれば、道徳的な善行と経典を信じ、経典を捧持する宗教的な善行が賞されたといってよい。実際、この経典が再編された十一世紀に、杜光庭によって付せられた「序」には、「不忠於君、不孝於親、違三綱五常之教、自投死地」（君に不忠、親に不孝、三綱五常の教えに違い、自から死地に投ずる）のを悪としている。いずれも儒家の教法・徳行を説くものであるが、だからといって儒教の影響によるわけではない。要するに世間の一般的な徳行のあり方がそうであっただけで、この徳行のあり方こそが、中国の伝統的な価値観であった。これはおそらくこの経典が形成され始めた四世紀においても同様であり、むしろ善悪の規準はそこにあったといってよい。三綱五常とは、君臣・父子・夫婦の道（三綱）と仁義礼智信（五常）を言い、漢代に唱された。特に五常は、董仲舒によって出された。

ただ、三綱の君臣の義、父子の親、夫婦の別は、孔子の孫子思の作といわれる『中庸』に、君臣・父子・夫婦・昆弟（兄弟）・朋友の五倫が記され、『孟子』に受け継がれる。漢儒以前から称された徳行であり、漢の儒教国教化の中で広く知識人を通じて求められた人倫であったといえる。もちろん五常についても、一つ一つの徳行はすでに『論語』に見え、これらが古代よりの徳育の目標であったことを知ることができる。

五代後唐の道士杜光庭がその序に、不忠不孝、三綱五常に違い、自死するものは「六天の故気、魔鬼や歴代の敗軍の死将、集結して生民を害する」というのは、善悪の規準がなお漢代以来の通念によっていたことを示す。儒教というよりも、儒教以前の人倫として理

解すべきであろう。

いずれにしても、悪をなすものは害されて生き残れない。では、その壊滅の時はいつか。

甲申の災害が起これば天下は大乱する。そして地上は蕩除されて新たな天地に生まれ変わる。その時、真君が出現する。（甲申災起、大乱天下、天下蕩除、更生天地。真君乃出）

この真君の治世は「天下大いに楽しみ、一たび種まけば九回収穫することができ、人の寿命も長くなる」（巻一）という。実はこの部分は、きわめて政治的な意図をもって書かれていて、その真君を「木子弓口」と記す。これは斥字で、一字を分割して記録する方法である。木子は「李」、弓口は「弘」すなわち李弘なる真君の出現を予言する。天地が壊滅する時を甲申の歳といい、その時善人を救って次の新たな天地に移す救世主を李弘というのである。新たな天地に移された人々を種民といい、新天地の種（たね）となる人類という意味である。この真君と種民の思想とその類似の思想は、これ以後しばしばあらわれて、政治的にも宗教的にも大きな影響力をもつようになるが、これがその最初の形態である。

2

こうしたメシアと千年王国の思想を、直截に現代の地球保全と環境論の中に位置づけてもあまり意味はない。確かに道徳的頽廃が天地の破滅をもたらすという紋切型の論法には役立つかも知れないが、それだけでは現代社会の複雑な状況に対応できない。

地球の保全という場合、当然そこには地球環境の保持とそこに住む人類、さらには多様な生物の存在が想起されよう。もし、人類を含む生物の生命活動の保全のみを考えるのなら、例えば五百年前の生活にもどることも一つの選択であろう。しかしながら、おそらくそれは不可能といわざるを得ない。つまり、人類の文明をどのように考えるのか、生命活動の維持よりも、むしろここにこそ地球保全の意義を見い出すべきであろう。

中国の種民の思想も「ノアの方舟」も実はその答えが明確に示されている。新しい世界に降り立った種民やノアとその家族は、彼らが存在していた古い世界の文化を持って来た。新しい世界に移ったその日からでも、古い世界と同等の生活を営むことが出来たのである。そしてその古い文化を基盤にして、新しい文化を築く。文明の永続と発展が潜められているのである。ただし、その古い文化は、善の純血性と正統性をもつ、あまりにも純粋な文化にほかならない。ここから生まれる文化とは一体何であろうか。しかし、種民の子孫数代に至れば、悪が雑じり、さらに「三千歳にしてすなわち更に天地を易える」という。初め善なる民によって作られた社会も、三千年の後には悪によって支配され、天地滅するというのである。結局、ここには人間のもつ救い難い業を前提としたメシアの思想が記される。ただ、前世から現世へ、さらに現世から来世へと文明は継承され発展する。天地革新のたびに、純善の文化のみが伝えられるが、三千年の後には悪業の中に沈溺する。人類の歴史はこれのくり返しである。

このような歴史観は、『書経』以来の、太古の堯舜禹三代の世を最も道徳的に優れた時代とし、以後時を経るに従って堕落していくという視点を基盤としているように思われる。それは、真君による最初の治世を最上として、聖人賢人や仙人が補佐する世であり、その時代が過ぎれば徐々に衰えていく。時には殷湯や周文・武王など有徳の王が出るが、全体

としては衰退に向かう。ただ、この歴史観には終末がない。どんなに堕落頽廃しても、この世は続く。ところが、太古の聖人たちは禅譲によって平和裏に王朝を交替した。しかし、その後の寡徳の王たちは自から身を引くことを知らず、放逐討伐されて王位を奪われた。ここから戦乱による王位の争奪が行われ、いまでは覇を争って治乱興亡の世は終わらない、というのが『史記』の史観である。

このような歴史観による限り、現世は最悪の状態におかれる。だからこそ、有徳の聖王の出現が期待されることになる。漢代儒学の立場から云えば、王朝の正統性にもとづく天命を得た皇帝の存在であり、天の代行者としての天子の存在である。したがって、天命が替われば王朝も替わる。王朝が替われば、制度・服色・暦法も替わる。暦とは、時節の大本である。そうであれば暦法の変換は時代ないしは世界の革新である。いわば、王朝の交替は新しい世界の出現であって、それゆえにこそ新しい時間がそこから始まる。元号とは時を支配し、その時の下にある世界を支配する象徴であるが、新しい天子のもとの新しい時代・世界の始まりでもある。徳を失った王朝から、新たに天命を得た王朝への交替を示す。いわば皇帝は天命の正統性による救世主の出現である。

こう考えてみると、劫の天地革新の思想も、王朝交替の論理も共に天の代行者、すなわち真君と天子による救済のあり方を示しているといえる。真君の場合は、悪人が蕩除された新天地ではあるが、その天地は以前の天地であり、別の宇宙ではない。もちろん王朝の交替も同じ天地で行われる。ただしこちらは、天命を失った王朝の支配者とそれに従属するものが悪となり、誅滅される。いわば極限化された劫末が現出する。

ところで、ここで問題としたいのは文化の永続性である。周知のように、中国の文明は伏羲・神農・黄帝によって形づくられ、殊に黄帝はあらゆる器具を作って民を利した（『史記正義』には「黄帝之前、未有衣裳屋宇、及黄帝、造屋宇、制衣服」という）。もちろんこれは伝説であって史実ではないし、黄帝なる帝王の存在さえ認められない。しかし、かつての史家はこれを歴史として記した。そこからこの虚構が歴史となって伝えられる。つまり、中国文明は黄帝によって作られた。その文明は、すでに最初から全ての器具が揃い、農事が整えられていたというのである。後に黄帝の臣であった蒼頡が鳥の足跡を見て文字を作った。一方、文字は伏羲が作り、漁猟をも教えたというのであるが、この伝説から見られるのは、太初の時には器具・文字・漁猟なにもなく、伏羲・黄帝の時代になって突然これらが行われるようになった、という文明観である。器具や建築・文字・兵器、若干の改良や変化はあるものの、基本的にはみな伏羲・黄帝以来の機能と形態をもった。つまり文明は進歩していない。太古の聖王の作った文明は完全であって無欠である。実際にはそうではないし、新しい発明もあったが、太古を最上とする史観からすれば、全ては伏羲・黄帝より始まる。これによれば文明は天によって作られたともいえる。文明を伝えることは民を利することであり、それは天の意志である。民が存在する限りこれを伝えなければならないのである。『旧約聖書』の立場も恐らく同じであろう。神の意志によって作られた人間に文明を与え、その文明がいかに淫蕩と邪悪にまみれようとも、一つの家族によって伝えられた純良な文明を残すことで、新しい世界を創造させたのである。

では、伝えられる黄帝の文化とはどのようなものであったのか。『史記』には「時節に合わせて穀物や野菜草木をうえ、その徳は鳥獣虫類にも及んだ」（時播百穀草木、淳化鳥獸蟲蛾）といい、なお「水澤山林に漁猟採木するのに時季を定めた」（節用火水材物）とある。

「節用火水」については、いささかの説明が必要である。火とは山野に火を放って逃げる獣類を捕り、水とは障堤を作って魚類を追い込む。いずれも大量の捕獲を目的とした。これを禁じて時期を定めて行わせた。同様に木材を伐り、建物・器物を造るにも時を定めたという。産卵出生萌芽の時候を辟けて、その保全を教えたものとされる（『史記正義』）。鳥獣にまで徳が及んだというのは、こうした保護保全の思想を指したと思われる。

この事跡もまた伝説以外の何物でもない。ただ古代の思想の中にこのような自然に対する視点が存在したということである。文化ということでいえば、古代の狩猟文化の中にそうした習慣があったということであろう。これを太古の聖王の教示として伝え、善良な文化として残そうとしたのがこれである。ところが戦国期以後の中国では、戦乱が続きしばしば都市や邑村が焼かれたため、森林を伐って木材を産出、家屋・官衙・宮殿の復興にあてた。始皇帝が長安に築いた阿房宮は一万人を収容し得る規模をもち、未完成ながら数ヶ月にわたって燃え続けたと伝えられる（『史記』始皇本紀）。それでも唐初までは、長安郊外に神禾原と称せられる森も存在した。ところが現在ではその地は全く平坦な樹木の見られない土地になっている。中国の古い都市周辺に森林が見られないのは、主には建築や燃料として消費されたからといわれるが、戦乱と商工業の発達が大きく影響したことは間違いない。黄帝の民が守ってきた文化も、結局はただの言説としてのみ残されたことになる。

3

道徳や文化の頽廃が天地の壊滅をもたらす、という論理からいえば、頽廃しない以前の原初の状態が最良ということになる。『老子』八十章に、「小さな国に少ない民」をテーマとした文章がある。

> 小さな国に少ない民。軍事の道具は持っても使わないようにさせる。死を重んじて（軽々しく死なない）、遠方に移住させないようにする。舟や乗りものがあってもこれを用いず、兵士がいてもこれを並べることなどしない（戦をしない）。人々には文字以前の縄を結んで印とさせ、そこで食べるものを全て美味なるものと思わせ、着る服も立派と思わせ、住む家も満足させ、その風俗習慣を楽しいことと思わせれば、隣の国が見えるところにあって、その国の鶏や犬の鳴き声が聞こえるようであっても、民は老いて死に至るまで、自分の国を最上と思い隣の国と行き来することはない。（小國寡人、使有什伯之器、而不用、使人重死、而不遠徙。雖有舟轝、無所乗之、雖有甲兵、無所陳之。使民復結繩、而用之、甘其食、美其服、安其居、樂其俗、鄰國相望、雞狗之聲相聞、民至老死、不相往來。）

この「小国寡民」の章は、従来、愚民化政策を標榜するものとして論じられてきた。確かに情報を遮断して、その国を最上のものと思わせれば、民は他を求めない。初めに兵器征旅のことが記されるのは、それだけ戦乱が多く、民がすでに戦いを厭う状況にあったことである。ここの一連の句は当時の民衆の生活を知る上で重要な示唆をしている。すなわち「死を重しとせしむ」とは、逆に死を軽んずる風が強かったということであろう。戦乱に倦み疲弊した生活の中で、生きる望みを失った人々を描いたと考えてよい。そうした状態の中で、文明を去った原始の生活に安住を求める。人為的に逆行させる手段として老子はこの章を記している。その基本は無欲あるいは寡欲。欲望を持つことで、より美味な食

物、美しい衣服、豪華な家屋を求める。粗食を美食と思わせ、粗衣を美服と思わせるには、他との比較の対象を無くすところにある。こうなると、文化や知力は低ければ低い程よい。

つまり「小国寡民」の説は、統治を前提としたとき、いかなる状態に民をおくか、という状況のみを論じたもので、いわば生命を維持するための国家像と考えてよい。ここには文明・文化、その原動力となる欲望をも排除したきわめて原始的な統治論が述べられている。

これは一つの例として重要である。文明を逆行させ、あるいは現状に止めることを政策としたとき、必ず同じような状況が現出する。確かに人口が半減すれば大半の環境問題は解決される。いや、文明を逆行させれば、必ず人口は半減する。現在では簡単に治る病気も命取りになる。衛生状態も悪化する。よほど高い道徳意識を持たない限り、犯罪も多発するし、農作物も激減する。粗衣粗食に甘んじたとしても、病気や災害を克服することは出来ない。考えてみれば、そうであったからこそ文明の発達があったのではないか。

種民もノアも、その時代の文明をもって新しい世界に降りる。それは文明というものの本質を知っていたからであろう。文明が生命の保全維持を図り、生活の安全と快適性を求めるものであれば、環境の保護保全はそのまま文明の発展に結びつく。無駄は論外であるが、エコロジーは不自由・忍耐・我慢にもとづいてはならない。例えばアメリカ東海岸の一部地域には、アーミッシュと称される開拓時代の生活をそのまま受け継いでいる集団がある。宗教的信念による生活である。ランプの生活に甘んじ、自動車を拒否し、高い道徳性を備える。ただし彼らは近代医療を拒否しないし、教育も普通の子供と同じ学校でうける。彼らは自からの意志によって、その生活をやめることも出来るし、部分部分に現代文明の利器をとり入れることも可能である。したがって、彼らは二十一世紀の中で、十八世紀の生活を営んではいるが、いつでも二十一世紀に行くことが可能であり、生命に関わることがあれば、現代の先端医療を受けることができる。こうした現代文明と隣り合わせの社会であるから、彼らの生活が維持されているわけである。実際、彼らアーミッシュの中から優れた学者や官僚が出ている。

文明の継承ということの一面の意義について述べてきたが、ここで思想としてのメシアについてふれておかなければならない。メシアすなわち終末論における救済者の出現は、紀元前のユダヤ民族の苦難の歴史の中から生まれた信仰、といわれる。これがキリスト教に受け継がれ、一方では古代イランのゾロアスター教、さらには古代インドへと及んだとされる。インド亜大陸から近東にかけての広範な地域に終末論とその救世主の思想が波及したことになるが、終末ということについていえば、道徳や文化の頽廃による世界の一新、悪の滅尽に目標がおかれる。これはその宗教の正当性を強調したものであろうが、終末に際して悪の文化は全て亡びる。ただしこれは、中国においては現実の問題というよりも神学上の問題としてあらわれた。それはすでに述べたように、盛徳の王の治世を再現することであり、王の威勢に感化された善民による国家の再現であった。真君李弘の出世を記し、甲申の大災を標榜したのも、神学としての善の追求、メシアとしての李弘の存在を明らかにしたにすぎない。干支による紀年は六十年で一巡する。つまり、六十年毎に危機が叫ばれ、李弘の出現が期待されることになる。この神学上の問題が現実世界に投影されたとき、多くの李弘が出現し、甲申年以外にも大災の年が示された。『太上洞淵神呪経』巻一より後に成立したとされる経巻に、甲申年以外の大水が記されるのはその意味であろう。

さて、こうした終末の後の新たな世界は、つねに古い悪徳の世界が蕩尽された同じ世界であって、それまでの天地とは全く別の宇宙ではない。悪人が滅尽しただけの古い世界である。同じ大地に再び新たな善人が生活し始めるのである。天地壊滅といったが、実は天地は壊滅しない。悪人のみが滅尽するのである。これが神学上だけの教説であるなら、むしろ天は落ち、地は裂けて宇宙は崩壊する。その時に救世主が現れて善人のみを理想の大地に移す、という構想も可能であったはずである。それがなぜか同じ大地を想定する経説として記される。その理由は、おそらく神の目的とするところが悪人のみの蕩除にあるからであろう。天地は造物主あるいは絶対神によって造られたが、大水を起こし、地を覆ったのは天であり地である。この天地を壊す必要はない。『老子』に「天は長く地は久し」というのは、永遠という意である。この自然観による限り、天地は壊滅しない。同じ大地の上で、悪を排除した同じ文明を継承して、新たな世界が開かれる。文明の永続と自然の不変性である。

終末論とはいうものの、それはこの世の終焉、世界の崩壊ではない。むしろ、世界を崩壊させないところに、この終末論の意味がある。ここがおそらくキリスト教神学と決定的に異なるところとなるのであろうが、古代の中国的宇宙観によれば、世界はこの現実の大地のみであり、神の国は存在しない。なぜなら、死者の魂はあの世には行かず、この世に存在する。神もまたこの世に存在して神の国をもたない。天の神格として上帝は存在したが、その神体は天であり、大地の神たる地祇も大地を神体とする。山岳や河川にも神は存在するが、山や川そのものが神体である以上、神格神の世界は存在しない。したがって、地獄もまた実在する山の中に想定された。神仙境もこの世の中に想定されている。この世界を離れた神の世界が創出されるのは、おそらく仏教の伝来以後になるのではないか。つまり古代の中国人は、現実のこの世以外に、架空の観念による別世界を想定しなかったのではないか。人間が生きる場所はこの世界だけであったといえる。しかも天地は神そのもの。これを崩壊させることはできない。劫末大災といっても、それは地表の蕩尽以外にはない。終末が到来しても生きる場所は同じところなのである。

結局、従前の大地の上に、同じ文化を接ぎながら新しい世界が始まる。したがって、何度終末を迎えて新しい世界が始まっても、また同じ終末を迎えることになる。通常、時間の経過と文明の発達は比例するが、この場合は新しい世界の始まりの時を最上とし、次第に世情は悪化してゆくことになる。確かに文明は発展するであろうが、善悪の文化でみると時間の経過と文化の基層は反比例することになる。まことに奇妙な文化観といわざるを得ない。

4

中国的終末論を分析することで、その自然観のもつ特異性を考えてみた。五行思想は、大地を東西南北四方の中央にすえて、その不変と不動、万物の基盤であることを明にする。この考え方をみても、現実の大地以外の世界は想像できなかったのかも知れない。かつて宮川尚志教授は、『太上洞淵神呪経』に記される大水の干支年によって、史書に記録された実際に洪水が起こった年を比べ、『太上洞淵神呪経』に予告された年の前後には、かなり頻繁に洪水が起こっている事実を指摘された（『中国宗教史研究』第一）。これはすでに大水

が到来して終末が現実のものとなり、大水後の世界が新しい天地に革新されたことを示すといえる。李弘を標榜するものが多数出現したのも当然といわねばならない。宗教的には終末は到来していたのである。しかし天地は不変であった。そして、地上の文明はそのまま承け継がれて現代につづく。

変わらない大地と文明の発展。エコロジーの理念を挙げるなら、そこにつきる。この場合の不変の大地とは、もちろんその大地の上にある自然界をいう。現実の地球と、宗教神学上の終末論を混同して論ずることは出来ないが、その終末論の奥に潜む時代の意識を窺うことは可能である。なぜなら、この中国の終末論は、明らかに現実に起こり得る、あるいは現実に起こった大水・洪水からの救済を説いているからである。そこに論者は文明の継承という意識を見る。